紫紺染について

宮沢賢治

盛岡の産物のなかに、紫紺染というものがあります。

これは、紫紺という桔梗によく似た草の根を、灰で煮出して染めるのです。

南部の紫紺染は、昔は大へん名高いものだったそうですが、明治になってからは、西洋からやすいアニリン色素がどんどんはいって来ましたので、一向はやらなくなってしまいました。それが、ごくちかごろ、またさわぎ出されました。けれどもなにぶん、しばらくすたれていたものですから、製法も染方も一向わかりませんでした。そこで県工業会の役員たちや、工芸学校の先生は、それについていろいろしらべまし

た。そしてとうとう、すっかり昔のようないいものが出来るようになって、東京大博覧会へも出ましたし、二等賞も取りました。ここまでは、大てい誰でも知っています。新聞にも毎日出ていました。

ところが仲々、お役人方の苦心は、新聞に出ているくらいのものではありませんでした。その研究中の一つのはなしです。

工芸学校の先生は、まず昔の古い記録に眼をつけたのでした。そして図書館の二階で、毎日黄いろに古びた写本をしらべているうちに、遂にこういういいことを見附けました。

「一、山男紫紺を売りて酒を買い候事、

山男、西根山にて紫紺の根を掘り取り、夕景に至りて、ひそかに御城下（盛岡）へ立ち出で候上、材木町生薬商人近江屋源八に一俵二十五文にて売り候。それより山男、酒屋半之助方へ参り、五合入程の瓢箪を差出し、この中に清酒一斗お入れなされたくと申し候。半之助方小僧、身ぶるえしつつ、酒一斗はとても入り兼ね候と返答致し候処、山男、まずは入れなさるべく候と押して申し候。半之助も顔色青ざめ委細承知と早口に申し候。扨、小僧ますをとりて酒を入れ候に、酒は事もなく入り、遂に正味一斗と相成り候。山男

大に笑いて二十五文を置き、瓢箪をさげて立ち去り候趣、材木町総代より御届け有之候。」

　これを読んだとき、工芸学校の先生は、机を叩いて斯うひとりごとを言いました。

「なるほど、紫紺の職人はみな死んでしまった。生薬屋のおやじも死んだと。そうしてみるとさしあたり、紫紺についての先輩は、今では山男だけというわけだ。よしよし、一つ山男を呼び出して、聞いてみよう。」

　そこで工芸学校の先生は、町の紫紺染研究会の人達と相談して、九月六日の午后六時から、内丸西洋軒で山男の招待会をすることにきめました。そこで工芸

学校の先生は、山男へ宛(あ)てて上手(じょうず)な手紙を書きました。山男がその手紙さえ見れば、きっともう出掛(でか)けて来るようにうまく書いたのです。そして桃(もも)いろの封筒(ふうとう)へ入れて、岩手郡(ぐん)西根山(にしねやま)、山男殿(どの)と上書きをして、三銭(せん)の切手をはって、スポンと郵便函(ゆうびんばこ)へ投(な)げ込(こ)みました。

「ふん。こうさえしてしまえば、あとはむこうへ届(とど)こうが届くまいが、郵便屋(ゆうびんや)の責任(せきにん)だ。」と先生はつぶやきました。

　あっはっは。みなさん。とうとう九月六日になりました。夕方、紫紺染に熱心(ねっしん)な人たちが、みんなで二十四人、内丸西洋軒に集(あつ)まりました。

もう食堂（しょくどう）のしたくはすっかり出来て、扇風機（せんぷうき）はぶうぶうまわり、白いテーブル掛（か）けは波（なみ）をたてます。テーブルの上には、緑（みどり）や黒の植木（うえき）の鉢（はち）が立派（りっぱ）にならび、極上等（ごくじょうとう）のパンやバターももう置（お）かれました。台所（だいどころ）の方からは、いい匂（におい）がぷんぷんします。みんなは、蚕種取締所（さんしゅとりしまりじょ）設置（せっち）の運動（うんどう）のことやなにか、いろいろ話し合いましたが、こころの中では誰（だれ）もみんな、山男がほんとうにやって来るかどうかを、大へん心配（しんぱい）していました。もし山男が来なかったら、仕方（しかた）ないからみんなの懇親会（こんしんかい）ということにしようと、めいめい考えていました。

ところが山男が、とうとうやって来ました。丁度(ちょうど)、六時十五分前に一台の人力車(じんりきしゃ)がすうっと西洋軒(せいようけん)の玄関(げんかん)にとまりました。みんなはそれ来たっと玄関にならんでむかえました。俥屋(くるまや)はまるでまっかになって汗(あせ)をたらしゆげをほうほうあげながら膝(ひざ)かけを取(と)りました。するとゆっくりと俥から降(お)りて来たのは黄金色(きんいろ)目玉あかつらの西根山(にしねやま)の山男でした。せなかに大きな桔梗(ききょう)の紋(もん)のついた夜具(やぐ)をのっしりと着込(きこ)んで鼠色(ねずみいろ)の袋(ふくろ)のような袴(はかま)をどふっとはいておりました。そして大きな青い縞(しま)の財布(さいふ)を出して、

「くるまちんはいくら。」とききました。

俥屋はもう疲(つか)れてよろよろ倒(たお)れそうになっていましたがやっとのことで斯(こ)う云(い)いました。

「旦那(だんな)さん。百八十両(りょう)やって下さい。俥はもうみしみし云っていますし私はこれから病院(びょういん)へはいります。」

するとと山男は、

「うんもっともだ。さあこれだけやろう。つりは酒代(さかだい)だ。」と云いながらいくらだかわけのわからない大きな札(さつ)を一枚(まい)出してすたすた玄関にのぼりました。みんなはあっとおじぎをしました。山男もしずかにおじぎを返(かえ)しながら、

「いやこんにちは。お招きにあずかりまして大へん恐縮です。」と云いました。みんなは山男があんまり紳士風で立派なのですっかり愕ろいてしまいました。ただひとりその中に町はずれの本屋の主人が居ましたが山男の無暗にしか爪らしいのを見て思わずにやりとしました。それは昨日の夕方顔のまっかな蓑を着た大きな男が来て「知って置くべき日常の作法。」という本を買って行ったのでしたが山男がその男にそっくりだったのです。

とにかくみんなは山男をすぐ食堂に案内しました。そして一緒にこしかけました。山男が腰かけた時椅子

はがりがりっと鳴りました。山男は腰かけるとこんどは黄金色の目玉を据えてじっとパンや塩やバターを見つめ〔以下原稿一枚？なし〕

どうしてかと云うともし山男が洋行したとするとやっぱり船に乗らなければならない、山男が船に乗って上海に寄ったりするのはあんまりおかしいと会長さんは考えたのでした。

さてだんだん食事が進んではなしもはずみました。

「いやじっさいあの辺はひどい処だよ。どうも六百からの棄権ですからな。」

なんて云っている人もあり一方ではそろそろ大切な用談がはじまりかけました。

「ええと、失礼ですが山男さん、あなたはおいくつでいらっしゃいますか。」

「二十九です。」

「お若いですな。やはり一年は三百六十五日ですか。」

「一年は三百六十五日のときも三百六十六日のときもあります。」

「あなたはふだんどんなものをおあがりになりますか。」

「さよう。栗の実やわらびや野菜です。」

「野菜はあなたがおつくりになるのですか。」

「お日さまがおつくりになるのです。」

「どんなものですか。」

「さよう。　みず、　ほうな、　しどけ、　うど、　そのほか、しめじ、　きんたけなどです。」

「今年はうどの出来がどうですか。」

「なかなかいいようですが、　少しかおりが不足（ふそく）ですな。」

「雨の関係（かんけい）でしょうかな。」

「そうです。　しかしどうしてもアスパラガスには叶（かな）いませんな。」

「へえ」

「アスパラガスやちしゃのようなものが山野に自生するようにならないと産業もほんとうではありませんな。」

「へえ。ずいぶんなご卓見です。しかしあなたは紫紺のことはよくごぞんじでしょうな。」

みんなはしいんとなりました。これが今夜の眼目だったのです。山男はお酒をかぶりと呑んで云いました。

「しこん、しこんと。はてな聞いたようなことだがどうもよくわかりません。やはり知らないのですな。」

みんながっかりしてしまいました。なんだ、紫紺のことも知らない山男など一向(いっこう)用はないこんなやつに酒を呑(の)ませたりしてつまらないことをした。もうあとはおれたちの懇親会(こんしんかい)だ、と云うつもりでめいめい勝手(かって)にのんで勝手にたべました。ところが山男にはそれが大へんうれしかったようでした。しきりにかぶりかぶりとお酒をのみました。お魚が出ると丸ごとけろりとたべました。野菜(やさい)が出ると手をふところに入れたまま舌(した)だけ出してべろりとなめてしまいます。

そして眼(め)をまっかにして「へろれって、へろれって、けろれって、へろれって。」なんて途方(とほう)もない声で咆(ほ)え

はじめました。さあみんなはだんだん気味悪くなりました。おまけに給仕がテーブルのはじの方で新らしいお酒の瓶を抜いたときなどは山男は手を長くながくのばして横から取ってしまってラッパ呑みをはじめましたのでぶるぶるふるえ出した人もありました。そこで研究会の会長さんは元来おさむらいでしたから考えました。（これはどうもいかん。けしからん。こうみだれてしまってては仕方がない。一つひきしめてやろう。）くだものの出たのを合図に会長さんは立ちあがりました。けれども会長さんももうへろへろ酔っていたのです。

「ええ一寸一言ご挨拶申しあげます。今晩はお客様にはよくおいで下さいました。どうかおゆるりとおくつろぎ下さい。さて現今世界の大勢を見るに実にどうもこんらんしている。ひとのものを横合からとるようなことが多い。実にふんがいにたえない。まだ世界は野蛮からぬけない。けしからん。くそっ。ちょっ。」

　会長さんはまっかになってどなりました。みんなはびっくりしてぱくぱく会長さんの袖を引っぱって無理に座らせました。

　すると山男は面倒臭そうにふところから手を出して立ちあがりました。「ええ一寸一言ご挨拶を申し上げ

ます。今晩はあついおもてなしにあずかりまして千万かたじけなく思います。どういうわけでこんなおもてなしにあずかるのか先刻からしきりに考えているのです。やはりどうもその先頃おたずねにあずかった紫紺についてのようであります。そうしてみると私も本気で考え出さなければなりません。そう思って一生懸命 思い出しました。ところが私は子供のとき母が乳がなくて濁り酒で育ててもらったためにひどいアルコール 中毒 なのであります。お酒を呑まないと物を忘れるので丁度みなさまの反対であります。そのためについビールも一本失礼いたしました。そしてそ

のお蔭でやっとおもいだしました。あれは現今西根山にはたくさんございます。私のおやじなどはしじゅうあれを掘って町へ来て売ってお酒にかえたというはなしであります。おやじがどうもちかごろ紫紺も買う人はなし困ったと云ってこぼしているのも聞いたことがあります。それからあれを染めるには何でも黒いしめった土をつかうというはなしもぼんやりおぼえています。紫紺についてわたくしの知っているのはこれだけであります。それで何かのご参考になればまことにしあわせです。さて考えてみますとありがたいはなしでございます。私のおやじは紫紺の根を掘って来てお

酒ととりかえましたが私は紫紺のはなしを一寸すればこんなに酔うくらいまでお酒が呑めるのです。

そらこんなに酔うくらいです。」

山男は赤くなった顔を一つ右手でしごいて席へ座りました。

みんなはざわざわしました。工芸学校の先生は「黒いしめった土を使うこと」と手帳へ書いてポケットにしまいました。

そこでみんなは青いりんごの皮をむきはじめました。山男もむいてたべました。そして実をすっかりたべてからこんどはかまどをぱくりとたべました。それから

ちょっとそばをたべるような風にして皮もたべました。工芸（こうげい）学校の先生はちらっとそれを見ましたが知らないふりをしておりました。

　さてだんだん夜も更（ふ）けましたので会長さんが立って、「やぁこれで解散（かいさん）だ。諸君（しょくん）めでたしめでたし。ワッハッハ。」とやって会は終（おわ）りました。

　そこで山男は顔をまっかにして肩（かた）をゆすって一度（いちど）にはしごだんを四つくらいずつ飛（と）んで玄関（げんかん）へ降（お）りて行きました。

　みんなが見送（みおく）ろうとあとをついて玄関まで行ったときは山男はもう居（い）ませんでした。

丁度七つの森の一番はじめの森に片脚をかけたところだったのです。
さて紫紺染が東京大博覧会で二等賞をとるまでにはこんな苦心もあったというだけのおはなしであります。

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
　　　１９９６（平成８）年６月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　　１９９５（平成７）年７月５日〜
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年５月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。